



TITLE:

雑報

AUTHOR(S):

CITATION:

雑報. 地球 1932, 17(5): 400-404

ISSUE DATE:

1932-05-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184033>

RIGHT:

四六版一四三頁の小冊子である、著者の経験から地理の教授法はかくあるべきだといふ意見を表白したものである。何分短かい紙面であるから語つて詳ならざるを得ない處があるやうである。

雜報

○地球學團、東京地質學會、日本岩石礦物礦床學會、日本火山學會聯合講演會

既報の如く四月二日三日の兩日に互り京都帝國大學工學部共同講義室に於て行はれ出席者約二百名に達し遠く北海道、九州より會同せし多數の學者ありて盛會を極めた。講演六十の内、地球學團員の行ひたものを擧げると次の如くである。

中央日本水河作用の遺跡と堆積物
信濃仁科山脈に産する石英閃長岩様アルカリ岩類

小川 琢治

所謂古銅石安山岩に就いて
巖陵島火山の拋出物に就いて

笹倉 正夫
吉澤 市

吉備高原の洪積世礫層と其の變位

春本 篤夫
竹山 俊雄

關東地方の新第三系の對比
關東州の震旦系

大塚彌之助
松下 進

八尾第三紀層特に含有孔蟲岩の分布に就きて

今村 外治

四國外帶の中生層
遠州の満水層問題
河内國堅上村地之地寫眞説明
河内國堅上村に於ける地之運動測定の結果に就いて

斜長石の透電恒數に就いて
黃鐵礦の電氣化學的現象

一光軸化現象を伴ふ二光軸結果(特に斜方及單斜結晶)の光軸面の變化に就いて

分極現象を利用する新電氣探礦法
硫化鐵礦の解離壓に就いて

榎ノ尾山斷層に就いて
本邦油田の地質構造的區分

京都市四條通を通ずる東西斷層に就いて
大阪市上町と下町との關係に就いて

平壤炭田南方外域の複雑な地質構造
大阪府待兼山產高師小僧

田上山の礦物と其の產狀
田上山產の一礦物

本邦產燐灰石の特質的構造に就いて
綠泥礦物のハロミロリスに就いて

平野の地形面と其の成因
和歌山縣溫州蜜柑栽培地の環境に就いて

鈴木 達夫
横山 次郎
上治寅次郎
松山 基範
川久保實太郎
原田 準平
松原 厚
江原 眞伍
大村 一藏
西尾銈次郎
西尾銈太郎
中村新太郎
君塚康治郎
中司 稔
上治寅次郎
原田 準平
高橋 純一
東木 龍七
山崎 直樹

斷層崖の諸型式に就いて 辻村太郎、相山正美
出羽地方に於ける更新期以後の地形變化に

就いて

大橋 良一

四月四日には奈良三笠山と河内國堅上村峠の地亡地の見學旅行を行った、會するもの七十餘名で、三笠山の基盤に、此の初めて第三紀層である藤原層のあることを發見したのは望外の幸であつた。峠では隈なく變動地を視察し得て満足のうち學會了へた。

○朝鮮主要都邑に於ける人口増加の狀態 昭和元年より同五年に至る都邑の人口増加の狀態を先づ府に就いて

見るに、京城、仁川、開城、群山、木浦、大邱、馬山、平壤、鎮南浦、新義州、元山、咸興、清津を通じ、人口増加總數は二十七萬三千三百八十三人に達し、内、自然増加數即ち死亡數に對する出生數の差増は三萬七千九百五十三人、移住増加數は二十二萬六千五百五十八人である。各府に就いて見るに増加數の大なるは釜山府の六萬七千九百九十三人を第一位とし、京城府の五萬二千七百十五人に次ぎ、その最も少なきは開城府の三千九百二十九人及び群山府の四千九百三十四人である。自然増加に於ては京城府の一萬二千五百八十一人が首位を占め、釜山府の六千七百四十二人にこれに亞ぎ、その最も少きは仁川府にして五箇年間に却つて三百十人の自然減少を來してゐる。又清津府の七十人、新義州府の三百三十三人の自然増加の如きも少ない方である。移住増加の最も大きいのは釜山府の六萬七千二百二十四人を第一位とし、京城府の四萬百二十八人に亞ぎ、大邱、平壤の二府も多い方であり、その最も小きは昔から出商業の盛んな開城府の百九人である。人口自然増加の少なき清津府、新義州府及人口自然減少を示した仁川府は孰れも配偶者の居ない支那人男子勞働者の多い處である。更に全鮮四十一箇所の邑に就いて見るに、五箇年間に於ける人口増加數は十四萬二百七十四人で、内、自然増加數四萬七百六十九人、移住増加數九萬九千五百五人である。而して各邑を通じ、人口増加數の最も大なるは、金州邑の一萬六千八百六十五人を筆頭とし、大田邑の一萬二千四百五十五人、光州邑の一萬一千五百十人、雄基邑の一萬九百八十八人等之に亞ぎ、その最も少なきは慶州邑の四百八十七人で、却つて減少を來したのは安州邑の一千五百五十人、義州邑の一千三百十四人、江界邑の六百四十七人、濟州邑の二百五十四人を算するものである。一方自然増加の最も大なるは濟州邑の三千九百二十人を第一位とし、之に次ぐものは安州邑の一千八百五十七人、尙州邑の一千七百六十八人、鎮海邑の一千五百九十五人、麗水邑の一千五百二十六人で、之等の地方は配偶數多く氣候の良い所である。最も少なきは兼二浦邑の二百七十九人で、浦項邑の三百一人、海州邑の三百六十五人、永登浦邑の三百七十八人、慶州邑の四百十二人も少ない方でその内、兼二浦、浦項、永登浦、海州の如きは配偶數少なく職工漁夫等の男子勞働者の多い市街地である。移住増加の最

も大なるは全州邑の一萬五千五百七十三人が筆頭で、大田邑の一萬一千二百七十九人、光州邑の一萬二百二人、麗水邑の五千六百三十六人、海州邑の五千五百五十六人等之に匹ぎ、その最も少ないのは慶州邑の七十五人であり、却つて人口の移住減少を示して居る處は濟州邑の四千七百七十四人、安州邑の三千四百七十七人、義州邑の二千六百二十二、江界邑の一千四百三人、密陽邑の六百二十五人、定州邑の四百七十七人、安東邑の二十七人がある。これ等の移住増加の大小及びその減少は、殖産興業の消長、交通運輸の影響、行政機關の移動等に左右せられた爲めである。即ち全州、大田、光州、麗水、海州の諸邑の如きは、近時鐵道等の交通機關が發達し、産業の進展著しき市街であり、之に反し慶州邑の如きは名所古蹟ではあるが經濟上何等見るべきものなく、濟州邑は住民の内地移住が多く、安州邑は新安州の勃興に依りて發展を妨げられ、義州邑は新義州府に道廳移轉以來衰微を續け、江界邑は交通の發達を見ぬ爲めに進展を見ぬのであると認められる。

(朝鮮總督府調査月報所載善生永助氏の記事に據る)

○北東シベリアのチエルスキー山脈

地球上で發見された最後の大山脈であるチエルスキー山脈に就いては「地球」第九卷第一號(昭和三年一月)に發見者オブルチエフの記事を掲げたが、其の後一九二九年より一九三〇年に互る探検でこの山脈の走り方が一層明にされた。其の結果の概略は次の如くである(前記の記事中の附圖を参照されたい)。チエル

スキー山脈は多數の竝走し、肢節に當んだ聯脈の連互する山地で幅百五十軒乃至二百五十軒、長さ千軒以上に達する。高きは約二千米を一般とし時に三千米を少しく越える點があるこの山脈は中生代及び第三紀に於ける地面向斜に該當してゐる。主軸は褶曲した三疊系から成り、之を貫くものに多くの花崗岩がある。花崗岩は主に今日の聯脈の軸に現はれる。三疊紀層に接して北方には花崗岩に貫かれた下部古生層より成る聯脈がある。古くタス・チャヤホタホと稱されたチエルスキー山脈の北西部はヤナ河とインディギルカ河との間を略南北走する。この構造は不明ではあるが恐らく北方の古生層聯脈の連續せるものであらう。猶ここには上部中生層が存在する。インディギルカ河の左岸は高さ二千乃至二千二百米に達する。ウエルホヤンスクの大窪地の縁邊には高さ二千乃至二千五百米で三疊系から成る聯脈が起る。この聯脈は殆んど解析されぬ高原を形成してゐる。或る山は高さ三千米あり、シエーン山は高さ三千百十四米に達する。聯脈はインディギルカ河の近くで低くなり且つ浸蝕作用によつて刻まれてゐる。インディギルカ河の東方に於ては聯脈は西北西―東南東の方向に亘り其の山頂は再び三千米まで高聳する。チエルスキー山脈の東部は南東に屈曲し、コリマ河附近では南南東の方向に轉ずる。猶ここでは山體が分裂し、高さ千八百乃至二千米の花崗岩山塊が蟠り高さ千乃至千三百米の低位の山脈で分たれ、又多くの高さ千百乃至千三百米の低い花崗岩山塊は臺地

を作し其の縁邊は圓味を帯びてゐる。然るに高い方は常に急峻でアルプス形を現はしてゐる。中央の聯脈は南東に向つてコリマ河を越えて走り、高さ約千米で、オホーツク・コリマ分水界をなす高原上には高さ千五百乃至二千米の聯脈が座してゐる。之に反し縁邊の聯脈は西方及び東方共に既に消え失せてゐる。(眞遠生)

○歐羅巴に於ける最深の湖水

ストレーム博士のノールウエー西部のノルドフキョルド地方の四つの湖水の調査によると其の主要形態の數値は次の如くである。

湖名	面積(平方軒)	湖面の高(米)	最大深(米)	容(立方軒)	積平均深(米)
ホルニンダー ルスヴァツン	五〇・八二	五	五・五	三・〇六〇	一三・七・五
ブライムス ヴァツン	三三・八六	三	二・六	二・九六六	一三〇・四
ストリン スヴァツン	二二・五五	三	一〇・九	二・八二二	一一〇・〇
ローエン ヴァツン	一〇・〇五	四	一三・一	〇・六二二	六六・六

從來ホルニンダールスヴァツンは最大深度として四八六米が測深されてゐる歐羅巴の最深湖として知られてゐたが、今度の測深によると五百十米以上のことが判つた。著しいことは第一に平均深度の大なることであつて歐羅巴で第二位の深い湖水であるメーサの平均深度を遙かに越してゐること。(メーサ湖の最大深度は四四三米、平均深度は一八七米)深度の大なるに對し表面積の小さなことである。ホルニンダール

ヴァツンの七月に於ける湖水の透明度は二十二米の深さで、今日までノールウエーで知られたものゝ最も明澄なものである。

○伊勢、大三村化石新産地

伊勢の新生代層中からは屢々化石を産し、中村教授は本誌第四卷(四四七頁、大正一四年)に詳細に報告せられた。その後、昭和五年から六年に亘り、參宮急行電氣鐵道工事のためトンネルの掘鑿や切取りが行はれた際に一志郡大三村二本木の西微北寒谷トンネル内及び、その東方の切取り二ヶ所、並に二本木の東微南龜谷トンネル内から多數の化石が出た。

次に記載する化石一四種は寒谷トンネル(參宮急行電鐵佐田驛と大三驛との間)所産であつて、京都帝國大學理學部地質學教室の黒田徳米先生に鑑定を乞ひて、種名を決定したものである。

Nucula (Acila) mirabilis Adams & Reeve, *Macona* sp., *Macona* (?) sp., *Lucinoma annulata* (= *Lucina*) Reeve, *Venericardia borealis* Conrad, *Yoldia* sp., *Yoldia amygdaloea* (?) Valenciens, *Tapes* (?) sp., *Lima* (*Acesta*) *goliath* Sowerby, *Periploma* cf. *bess-hoensis* (Yokoyama) [Tellina] *Nautica* sp., *Turritella* sp., *Buccinum*, *Teredo* (?)

以上一四種中でニキキユラ(五個)、ベネリカーヂヤ(六個)、ナチカ(六個)、ルシナ(三個)の他は何れも一個又は二

個體で、黒田先生に鑑定して頂いた總数は三十四個體であつた。

尙、右の化石の現出状況について見るに、大三驛より西微北、線路に沿ひて、三〇〇米にして北方に通ずる山道あり、この道分れより寒谷トンネルに至る間、線路の北側の山には多くの化石が出で、切取りには保存の良好なる化石が散在する。地層は殆んど水平層で砂質頁岩を主とし、其色灰白色、稍硬き褐色頁岩は約三〇糎内外の厚さを以て砂質頁岩と互層する。思ふに小川博士の一志層に包括される地層らしく、中村教授によれば安濃郡高宮村附近の地層は中新世とせらるゝを以て、多分上記の化石及びその地層も亦中新世に屬するものかと思ふ。

而して、寒谷トンネル内には厚さ約三糎位の石炭層があり北方の榊原村附近に至る間には、しじみ貝、たにし貝の化石を出す地層があつて、筆者は大型の蟻に似た動物の化石を採集した。この地層と前記地層との層位的關係は未調査であるが、後者の時代は近畿に屢々見る淡水層(湖成層)で小川博士の奄美夾炭層又は中村教授の近江の近江層と同様な地層で洪積世古期に屬し、中新世と考へらるゝ地層とは不整合關係にあるだらうと思はれる。

(三重縣立名張高等女學校 上田世志子)

○石川成章氏還曆祝賀會

石川成章氏は多年中央幼年學校、福岡鑛山監督署、京都帝國大學工學部及理學部等に勤務されて日本の地質鑛物學界の爲めに御盡瘁されてゐられたが、本年三月京都大學講師を辭されて悠々天地を御樂しみになることになつた。同氏は本年六月二十二日を以て還曆の壽を迎へられるので知友後輩の諸氏が發起となつて多年の御勤勞に聊か報ゆる爲め祝賀會を起し、同氏に祝賀の金品を贈呈することになつた。地球學團員等にてこの祝賀を共にせられんとする諸賢は左の要項により御賛同あらんことを希望する。

一、金參圓宛を醸出すること

一、締切期日五月三十一日

一、京都帝國大學理學部地質學鑛物學教室内
石川成章氏還曆祝賀會(振替口座大阪五八
八七六番)へ御送金のこと。

昭和七年五月 地球學團